様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 3 日現在

機関番号：34314
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20720066
研究課題名（和文）　西鶴と団水を中心とする、浮世草子と俳諧に関する総合的研究
研究課題名（英文）　A general study on Ukiyo-zoshi and Haikai centering on Saikaku and Dansui

研究代表者
水谷　隆之（MIZUTANI　TAKAYUKI）
佛教大学・文学部・講師
研究者番号：60454500

研究成果の概要（和文）：西鶴と団水の浮世草子、俳諧およびその周辺諸分野に関する研究を行った。俳諧については、『俳諧団袋』所収句をはじめとする西鶴と団水の連句に注釈を施し、両者の俳諧の共通性、西鶴晩年の俳諧における談林俳諧からのつながりおよび元禄俳諧との関連性を具体的に示し、俳諧史上に新たに位置づけた。また、当時の他の作者の浮世草子や遊女評判記に関する調査をあわせて行い、その研究成果をふまえ、西鶴と団水の浮世草子の内容分析を行った。

研究成果の概要（英文）：The document reports a study on Ukiyo-zoshi and Haikai of Saikaku and Dansui, including relating fields. In the research of their Haikai, the annotation was newly applied to “Haikai-Danbukuro” etc.. As a result, the similarity between Saikaku and Dansui and the relation among Saikaku’s Haikai in his later years, Danrin-Haikai, and Genroku-Haikai were pointed out. Moreover, the features of Ukiyo-zoshi written by Saikaku and those of Dansui were newly clarified. On this study, my investigation and analysis on Ukiyo-zoshi of other writers and the reputation records of prostitute namely Yujo-Hyobanki at that time are reflected.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：井原西鶴、北条団水、浮世草子、俳諧

１．研究開始当初の背景

西鶴の俳諧については、今栄蔵氏（『初期俳諧から芭蕉時代へ』笠間書院、2003 等）や乾裕幸氏（『初期俳諧の展開』桜楓社、1968、『俳諧師西鶴』前田書店、1979 等）による一連の優れた研究がある。しかしながら、西鶴晩年の俳諧に関しては、作品の内容に即した具体的な研究が未だ十分にはなされておらず、西鶴俳諧と元禄俳諧の関係や、浮世草子の創作を経た西鶴俳諧の変化についてなど、検討を要する課題が多く残されていた。

また、西鶴の浮世草子については従来数多くの研究が積み重ねられてきてはいるものの、門人による加筆・擬筆の有無について、西鶴が晩年に俳諧活動を再開した理由およ

びその時点で創作された浮世草子の特徴について、出版書肆や他の俳諧師たちとの交流関係についてなど、未解決の問題が多く残されていた。

西鶴第一の門人として知られる北条団水についての研究も立ち後れたままであった。団水は、俳諧師、浮世草子作者として活躍したばかりでなく、西鶴遺稿集全ての編纂に携わり、数多くの俳諧師・浮世草子作者・出版書肆と関係し、それら複数のネットワークの中で常に中心的な立場にあったと目される、文学史上重要な人物である。既に宗政五十緒氏（「北条団水年譜」『近世文芸』3 号、1956）や野間光辰氏（「北条団水年譜」『北條團水集別巻』古典文庫、1983）による年譜が備わり、『北條團水集』（全 6 冊、古典文庫、1980－1983）には団水作品のほぼ全ての翻刻が完備しているものの、そうした基礎研究がなされて以後、その重要性を常に指摘されながらも、団水とその作品についての調査・分析はほとんどなされておらず、不明な点が多く残されていた。すなわち、従来の団水研究は西鶴研究の一部としてなされたものがほとんどであり、団水作か否か不明な作品についての作者認定問題、団水と出版書肆あるいは西鶴との関わりについてなど、重要な問題が未解決のまま残されている、というのが実情であった。

そこで研究代表者は、本研究開始当時までに、『諸宗鉄槌論』（貞享 4 年刊）と『好色破邪顕正』（貞享 4 年刊）の作者を団水と認定し、また、宝永期に団水がかかわった出版書肆の活動について調査し、それらに団水が及ぼした影響のさまを明らかにするなど、基礎研究の充実に努めてきた。そしてそうした一連の調査の結果、出版および俳諧活動面における団水と西鶴の連携の事実が新たに浮かび上がり、西鶴晩年の文芸活動が、団水の協力のもとで従来考えられていた以上に能動的・積極的に行われたとの見通しを得るに至った。

本研究は、団水に関する基礎研究を充実させつつ、俳諧・浮世草子およびその周辺諸分野の研究をあわせて行うことにより、上述の諸問題を多方面から実証的に解明しようとしたものである。

２．研究の目的

浮世草子・俳諧およびその周辺諸分野の研究を、井原西鶴とその第一の門人である北条団水との双方に関して行うことにより、それら一方についてのみでは不十分であった各研究を補完、相対化し、未解決のまま残されていた西鶴・団水に関する種々の問題を解明し、元禄期の文学状況を浮き彫りにする。具体的には、以下の３点を主要な研究目的とした。

(1)元禄期における西鶴と団水の俳諧について精査し、元禄俳諧や蕉風俳諧との類似点・相違点を明確にし、俳諧史上に新たに位置づける。また、西鶴の浮世草子と俳諧の関連性や、当時の俳諧師たちの浮世草子受容の実態を明らかにし、浮世草子と俳諧の関係を具体的に示す。

(2)団水の浮世草子の創作時期は、貞享年間（1684-1688）の初期作と宝永年間（1704-1711）の後期作とに大きく分かれる。西鶴生前に執筆された初期作においては、執筆時における両者の相互影響関係が注目される。また、西鶴没後に執筆された後期作では、西鶴遺稿集の編纂を通して得られた新たな創作意識とともに、八文字屋に対立する出版書肆との関係ならびに他の作者の草稿への関与の有無等が注目される。上記を念頭に置いて団水作の正確な分析を行い、当時の文学状況を明らかにするとともに、西鶴作浮世草子への団水の加筆・擬筆問題について検討するための基盤を調える。

(3)浮世草子・俳諧および周辺諸分野に関する研究を行い、それらの有機的なつながりを示し、作品の精確な読解につなげる。また、それぞれを文学史上に新たに位置づける。

３．研究の方法

(1)主に元禄期における西鶴と団水の連句の分析を行った。西鶴の俳諧のうち、既に注釈のあるものについてはそれを参考にしつつ、とくに連句における付合の手法に注目して独自に分析しなおした。団水の俳諧については、『俳諧団袋』（元禄 4 年刊）に収録された西鶴との両吟半歌仙ならびに他の俳人との間で巻かれた連句に注釈を施した。西鶴と他の元禄俳人との間にみられる類似点と相違点とを、団水を軸に相対的に把握しようとしたものである。また、『俳諧石車』（西鶴著、元禄 5 年刊）や『俳諧特牛』（団水作、元禄 4 年刊）にみられる両者の俳論に関する分析結果をここに反映した。

(2) 従来西鶴作浮世草子との類似箇所のみが注目されてきた団水初期の浮世草子『色道大鼓』（貞享 4 年刊）について、各章に用いられた典拠や他の浮世草子との関連性を精査し、新たに作品分析を行った。また、『昼夜用心記』（宝永 4 年刊）についても、西鶴および同時代の他の浮世草子との関連性を探りつつ分析を行った。西鶴・団水と出版書肆との関係については、これまでの調査を継続し、書肆の出版物を精査し、その動向を追

った。

(3) 同時代の他の作者の浮世草子・俳諧ならびに遊女評判記の諸本調査を行い、未翻刻のものは随時翻刻し、浮世草子成立の背景、内容面における相互の関わりについて精査した。

４．研究成果

(1)『俳諧団袋』（団水編、元禄４年刊）所収西鶴・団水両吟半歌仙２巻、『蓮実』(賀子編、元禄４年刊）所収西鶴句をはじめとする連句の内容分析を軸に、西鶴と団水が、談林時代からみられた〈ぬけ〉〈とび〉といった手法を発展させて用いることで当時流行の疎句を招来したことを、具体的に指摘した。また、元禄当時の西鶴の俳諧が、いわゆる元禄俳諧や当時の蕉風俳諧の特徴と近接するものであることを示し、それとの懸隔を指摘する従来の評価、すなわち西鶴が元禄新風俳諧に遅れをとった例として扱われてきた『団袋』所収半歌仙の評価を改めた。くわえて、連句の付合に、西鶴浮世草子と共通する世の中への認識が用いられていることを具体的に示した（以上、「『団袋』の西鶴－団水との両吟半歌仙について－」、『国語と国文学』、86 巻 7 号、2009 年 7 月)。なお、これまで注釈のなかった『団袋』所収西鶴・団水両吟半歌仙に新たに注釈を施して発表した（「『団袋』所収西鶴・団水両吟半歌仙注釈稿」、『京都語文』、17 号、2010 年 11 月)。ただし、『団袋』の他の所収句や『くやみ草』所収句など、団水が他の俳諧師と巻いた連句に関する分析については、整理が間に合わなかった。今後の課題としたい。

(2) 教訓臭が強く、また西鶴作の切り接ぎに過ぎず文学的形象も不十分との否定的評価が先行してきた団水の好色物浮世草子『色道大鼓』(貞享４年刊) について再検討した（「団水の好色物―『色道大鼓』巻三の一・五の一を例に―」、『西鶴と浮世草子研究』、4 号、2010 年 11 月)。団水は、『源氏物語』『伊勢物語』等の古注釈書が示す寓言説を念頭に置き、一定の構成意識のもとで各種典拠を利用していること、好色を滑稽に描きつつ教訓を示すことに主眼を置いており、『好色破邪顕正』（団水作、貞享４年刊）における好色本批判との間に齟齬がないこと、を確認した。あわせて、『好色大神楽』（増田円水作カ、貞享 4 年刊）との関係についても言及したが、両作の成立経緯についてはさらに追究する必要がある。また、『昼夜用心記』（宝永４年刊）の注釈ならびに分析も未整理のまま残った。今後の課題としたい。

(3) 延宝から正徳に亙る吉原遊女評判記を網羅的に調査し、西鶴作浮世草子の内容分析に反映した。『西鶴置土産』（元禄６年刊）の遊女「小主水」が正確な情報のもとで記述されていることを明らかにし、従来の注釈の誤りを正したことも、その研究成果の一部である（「『西鶴置土産』の山本の小主水について」『日本古書通信』972 号、2010 年 7 月、のち『西鶴と浮世草子研究』4 号、2010 年 11 月に加筆再録)。なお、遊女評判記に関する研究成果の一部を、『江戸吉原叢刊』第 3 巻・第４巻（八木書店、水谷隆之責任編集、2010 年 8 月・2011 年 3 月刊）に翻刻・解題として収めた。今後は、遊女評判記に関する調査結果をもとに、浮世草子のさらなる分析を行いたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 水谷隆之、「団水の好色物―『色道大鼓』巻三の一・五の一を例に―」、『西鶴と浮世草子研究』、4 号、査読無し、2010 年 11 月、pp. 118-130

② 水谷隆之、「『団袋』所収西鶴・団水両吟半歌仙注釈稿」、『京都語文』、17 号、査読無し、2010 年 11 月、pp. 229-242

③ 水谷隆之、「研究史を知る『西鶴織留』」、『西鶴と浮世草子研究』、3 号、査読無し、2010 年 5 月、pp. 193-196

④ 水谷隆之、「『団袋』の西鶴－団水との両吟半歌仙について－」、『国語と国文学』、86 巻 7 号、査読有り、2009 年 7 月、pp. 29-42

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）

① 大橋正叔・丹羽謙治・伴野英一・水谷隆之・渡辺憲司編、八木書店、『江戸吉原叢刊』、第４巻、2011 年 3 月、519 頁

② 大橋正叔・丹羽謙治・伴野英一・水谷隆之・渡辺憲司編、八木書店、『江戸吉原叢刊』、第３巻、2010 年 8 月、439 頁

６．研究組織

(1)研究代表者
水谷　隆之（MIZUTANI　TAKAYUKI）
佛教大学・文学部・講師
研究者番号：60454500